資 料

日本におけるゴキブリ類の研究の記録補遺

Notes on the past knowledge of the cockroaches in Japan A bibliographical survey

朝比奈正二郎*

Syoziro Asahina

筆者は、既に(1955, 1960, 1961, 1963), 本邦に於て明治以降に行なわれた邦産ゴキブリ類の、主として分類学的記述の整理を試みたが、其の後主に明治の後年に於て、我が国の昆虫研究者が邦産のゴキブリ類をどのように扱つて来たかに興味を持ち、「博物之友」或いは「昆虫世界」等の雑誌などから当時の知見を抽出してみた。ここに記述する内容は、従つて、純分類学的な処置を論ずるものでなく、主として和名によつて、当時の知見の整理を試みたものと了解していただければよく、最後にゴキブリ類の方言等にも少しくふれた。これらについて筆者の思いがけい見落しの文献等を御認めの方があつたならば、御教示を下さるゝように御願ひする。ここでは松村氏の日本昆虫学(1898)以後素木氏が新種を記載はじめる頃まで(1906~08)の間のものを主に扱つた。

手許に欠けた文献を参照するに際しては、農技研の長谷川仁氏を煩わした。ここに謝意を表する次第である。

邦産ゴキブリ類の種類に関する知見

以下、暦年順に記述して、これに筆者の解釈を附してゆくことにする。

既に記したように、邦産ゴキブリ類各種の名称を、方言でなく、標準和名の意味に於て用いたのは

1898(明治31年)松村松年、「日本昆虫学」p.56のゴキブリ(*Periplaneta americana*)、チャバネアブラムシ(*Phyllodromia germanica*)、オオアブラムシ(*Panesthia angustipennis*)を以て嚆矢とする。

1902(明治35年)岐阜の名和昆虫研究所より出されていた「昆虫世界」に、「土佐産の虫報」を連載していた武内護文氏(高知県土佐郡在住)は、第5報(昆虫世界, 6(60), 326-329)に於て、“蜚蠊科(一)ゴキブリ、(二)チャバネアブラムシ、(三)オオアブラムシ”を

挙げ、“此の中(一)(二)は最とも普通に(三)は山中に産するも其の数多きも見ず、一種山中及び海浜の沙上に産して形色(二)に酷似するも、其幼虫と成虫の少[し]異なるものあり”と述べた。この最後に記されたものは今日のモリチャバネかヒメチャバネであろう。

同じ「昆虫世界」上に(6(63), 441-445)長野菊次郎氏は“蜚蠊につきて、上”として当時発行されたUSDA(北米合衆国農務省)の昆虫部助手 Marlatt 氏の解説書を紹介し[抄訳?], つづいてその下(6(64), 490-493)に於て、“本邦に産する普通の蜚蠊の学名につきては、余之を確言する能はず、恐らくは未だ学名を有せざる種にあらざるなきか、或る一二の書には *Periplaneta americana* を当てあれども、こはその標本を比較すれば一目の下に錯誤に出でしものなることを弁別すべし、その胸部は割合小さきを以て……[ヤマトゴキブリを指す?], ……台南県に産する一種にアメリカナと一致するものあり[ワモンであろう], 又大阪地方に産して、普通のものとは異なる一種あり、形状よくアメリカナに類似すれども少しく小さし[クロゴキブリか?], 台北県に産する一種には *P. australasiae* と符合するものあり[コワモンであろう]。而して普通産のチャバネアブラムシは確かに、*Ectobia (Phyllodromia) germanica* なり[モリチャバネも含むか?]”。更に敵虫、駆除法についても記述がある。

1903(明治36年)名和靖氏は昆虫に関する随感随想第三回(昆虫世界, 7(73), 384-386)中に於て、ゴキブリの分布についてと題し、“茲にはただ二種についてその分布を示さんとす”, として、甲種(ゴキブリ)に属するものは、岐阜郡(全部)、石川県鹿島郡、京都府天田郡及与謝郡、鳥取県東伯郡に、乙種(ムナビロゴキブリ)は愛知県宝飯郡及渥美郡、静岡県志太郡、千葉県長生郡、鳥取県西伯郡、島根県那賀郡、徳島県勝浦郡、大分県南海部郡、宮崎県(農事試験場)に分布するとした。又卵塊と成虫の挿図を示しているが、これを見れば甲種は今日のヤマトゴキブリであり、乙種“ムナビロゴキブリ”と新称したものは明らかにクロゴキブリである。

1904(明治37年)小竹浩氏は皇太子殿下奉献中等教育昆虫標本詳解(其9)(昆虫世界, 8(81), 182-185, 第5版口絵)に於て、“117. アブラムシ(*Periplaneta americana* L.)”を図説し、その記載中に、“雄は翅長く全く腹部を覆へども、雌は翅短く腹部の後半を露出す”と記した。その図版中の写真 8 号を見ても、これがヤマトゴキブリを指すものであることは明瞭である。この中に“前胸大きく恰も碁子を冠りたる如く見ゆるを以てゴキブリ又はゴキカブリト云う”とあるが、この碁子(碁石入れ)は正しくは御器(食器)と解すべきで

* 国立予防衛生研究所衛生昆虫部
Department of Medical Entomology, National
Institute of Health, Tokyo

あろうと思う。

同誌(82), 225-229 に小森省作氏は、第一回岐阜県昆虫分布調査(7)を解説しているが、ゴキブリ科中に、“ゴキブリ (*Stylopyga concinna* Hag.)”, “チャバネゴキブリ (*Phyllodromia germanica* Steph.)”, “オオゴキブリ (*Panesthia angustipennis* Illig.)” の3種をあげた。“ゴキブリ”は早が短翅であるという記述よりみればヤマトゴキブリを指し、“チャバネゴキブリ”は“山林原野にも亦尠からず”とあつてモリチャバネを混じており、“オオゴキブリ”は挿図を見ても今日のものと同じ物であろう。

この年に出版になった松村博士の日本千虫図解第1巻は当時の昆虫分類学の標準となつたものであろうが、これには“ゴキブリ (*Stylopyga concinna* Hag.)”即ちヤマトゴキブリ, “コバネゴキブリ (*Stylopyga orientalis*)”即ちトウヨウゴキブリ, “チャバネゴキブリ (*Phyllodromia germanica* Steph.)”当然チャバネとモリチャバネの混合, “オオゴキブリ (*Panesthia angustipennis* Illig.)”が図説された。

同じ年佐々木忠次郎氏は、東洋学芸雑誌, 12月号に於て、「蜚蠊につきての説」として屋内害虫であるチャバネゴキブリのことを解説した。更に1905(明治38年)少年向けの月刊雑誌「少年」1月号にも同様な記述をした。[この両文献は直接参照し得なかつた]。

矢野宗幹氏は「蜚蠊につきて」と題し(博物之友, 5(25), 104-105)上記の佐々木氏が蜚蠊の文字を全然チャバネゴキブリのみにあてたことは不当であるとし、自身豊前に於て観察した所より:

ゴキブリ: 常に屋内に多数に生じ、屋外に於ては之を見ず、食物等を害す。

チャバネゴキブリ: 稀に屋下に見らるるも多くは森林の枯葉下又は原野の石下にあり、幼虫又は成虫にて越冬す。

とし、前者はアブラムシ又はゴキブリ(筑後)として知られるもので、佐々木氏が後者を室内害虫として挙げたのは不思議であるとした。今日から見れば、佐々木氏のものはその頃も都市だけに限られて棲息したと思はれる真のチャバネゴキブリで、一方矢野氏のチャバネゴキブリは、全くモリチャバネゴキブリであつたと推定できる。又矢野氏の“ゴキブリ”も恐らくクロゴキブリを指したのではないかと思われる。

小熊捍氏(博物之友, 5(25), 145)は“矢野氏の「蜚蠊ニ就キテ」に就きて”と題し、東京に於ては「真正の」チャバネゴキブリは佐々木氏の云う如く室内害虫であると記した。之に対し矢野宗幹氏(博物之友, 5(27), 209-210)は“再びゴキブリに就て,”と題し、豊前に於

ては“ゴキブリ〔?クロゴキブリ〕”は大害虫で、その被害の程度はチャバネ〔即ちモリチャバネ〕と同日の論ではないと記した。

1906(明治39年)矢野宗幹氏は重ねて、ゴキブリ類に就きて(上)と題し(博物之友, 6(30), 27-29), その後の資料に基づいて、和名についての文献上の知見を総攬し、和名についてはゴキブリという名称をこの類の総称にするのが妥当であるとした。引続き、ゴキブリ類に就きて(下)(博物之友, 6(32), 138-141)に於ては、九州産の種類として、

1. むねびろごきぶり(学名未詳)豊前, 豊後, 筑前, 肥後, 薩摩〔この和名は名和氏(1903)より由来するものと思われる。これは明らかにクロゴキブリを指す。〕

2. 学名未詳 肥後熊本(山崎又雄氏)[本種については全然記述なく、今日の何種を指すか全く不明。]

3. おおごきぶり *Panesthia angustipennis* 筑前鞍手郡(小南迅氏)

4. ちゃばねごきぶり *Phyllodromia germanica* 筑前, 豊前, 豊後, 肥後〔これは会部モリチャバネと見るべきであろう。〕

をあげ、又屋内種の問題にふれ、土佐の武内護文氏報ずる所に“チャバネゴキブリは1市或いは1村中稀に発生し其家には大群蟻集して加害大なるも前者[ゴキブリ]の如く凡ての家に発生するにあらず”とあり、又矢野氏自身が“昨年八月大分より竹田に入らんとし、茶店の竈辺を見るに幾十百の小虫右往左往するものあり、就きて是を視るにチャバネゴキブリなり云々”とあるのは共に果して真のチャバネであるか不明、矢張りむしろモリチャバネの可能性が強い。なお他の屋内種として、ゴキブリ[ヤマトゴキブリ]及びムナビロゴキブリ[クロゴキブリ]を挙げ、前者は本邦の東部に後者は西南部暖地に見られるとした。

次に野外種として、“チャバネゴキブリ”が森林の枯葉下等に多数見られるのを述べているが、これはくり返し註記したように全くモリチャバネゴキブリに外ならない。ゴキブリ[ヤマト]とムナビロ[クロ]も共に野外に見られることが述べてあるが、これは今日でも特に夏期には両種が戸外に見られることがあつて、むしろ当然なことであろう。

最後に矢野氏はゴキブリ類の和名の整理を試み、

1. *Phyllodromia germanica* L. チャバネゴキブリ〔実はモリチャバネを含む〕

2. *Panesthia angustipennis* Illig. オオゴキブリ

3. *Stylopyga concinna* Hag. オホクロゴキブリ(矢野氏改称)[ヤマトゴキブリ]

4. *S. orientalis* L. コバネゴキブリ〔トウヨウゴキ

ブリであるが日本には産しない筈]

5. 学名不明 ムネビロゴキブリ〔実はクロゴキブリ〕

6. *Periplaneta americana* L. ワモンゴキブリ〔果して当時台湾以外の本邦に産したか不明〕

7. *P. australiasie* [!] F. ヒメワモンゴキブリ〔果してコワモンゴキブリが台湾以外の本邦の地に産したかどうか不明〕

8. *P. palita* Walk. ダイワモンゴキブリ (松村)〔何を指すか不明〕

9. *P. semicincta* Wk. オビゴキブリ (松村)

重ねて矢野氏は、ゴキブリ追記 (一) として (博物之友, 6(33), 228) に、青森の新渡戸稲雄氏よりの「当地にも兵舎の所在地に *Stylopyga concinna* の繁殖するものを採集せることあり云云」及び、丸亀の箕浦忠愛氏のムナビロゴキブリ〔クロゴキブリ〕の幼虫らしきものを「本種は丸亀にては普通に戸棚押入れにありて加害甚しきものに候」という記録を加えた。

1907 佐々木忠次郎氏は三度“チャバネアブラムシ”の記事を記し (昆虫学雑誌 (東京), 2(5), 221), [真正の] チャバネゴキブリの生態、駆除法を記した。駆除法には種油をひいたトラップなど述べてあるが、依然屋内種のチャバネゴキブリ一点張りであった。

この頃より素木博士の新種の記載がはじまったが、同氏の報文は其の後のすべてに亘つても、これまでここに記述したような和名、学名、生態、分布等の論議には全く無関心で、凡そこれらを参照した形跡の見られないのは誠は不思議という外はない、従つてこの後の邦人研究者による若干の論文もあるが、台湾種についての外は、見るべき内地産ゴキブリの分類、分布、生態等の記述は極めて寥々たるものとなつて、以上縷述した問題は混乱のまま遂に最近に至つたと云つても過言でない。

ゴキブリの名称方言古記録等について

表記の問題については現在手許に十分な資料はないが二三心覚えを書きとめておきたいと思う。

上述した矢野宗幹氏の報文 (博物之友, 6(30), 27-29 1906) に於ては:

“名称: コノ類ノ和名トシテハあぶらむしノ名比較的古ク且ツ広く使用セラレ、ごきあらひむし是ニ次グ (倭訓の槩, 言海, 言葉の泉ニ拠ル)。古名トシテつむしの名アリ。和名抄ニ出ヅルモ蜚蠊ニ訓ジタルモノニシテ漢名ガ正確ニ使用セラレタルカ否カ知ルベカラザルナリ、其他方言ニ就テハ本草綱目啓蒙ニ詳ナリ。”とあり。

小野蘭山著、重訂本草綱目啓蒙、第4巻、三十七、化生虫部の“蜚蠊”の項を引用すれば: “蜚蠊 ツノムシ (和名鈔), アブラムシ, ゴキカブリ (筑前, 筑後, 伯

州, 雲州) ゴキクラヒムシ (勢州), アマメ (同上, 山田, 薩州, 肥前), ゴキカブラウ (肥前), ゴゼムシ (土州), 平八アマメ (紀州), アマクヒムシ (越前), ゴキアラヒムシ (丹後), [中略]

“夏秋ノ間竈辺厨篋中ニ甚ダ多シ、長サー一寸余径六七分、翼アリ、夜飛全身褐色、微黒油色ノ如ク兼テ油臭アリ、口ニ利齒アリテ器物ヲ嚙損シ食物ヲ敗リ大ニ害ヲナス、一種形小サク四分許ノ長サニテ翼モ備ル者アリ、紀州ニテアマメ〔ト〕云故ニ尋常ノアブラムシヲ同所ニテ平八アマメト云”〔下畧〕

矢野氏自身 (1906) で当時確認された〔黒色大型種の?〕方言は次のようである。

ごぜむし (土佐), あぶらむし (豊前), あまめ (鹿児島) づつきこぶり (肥後), ごきかぶり (筑前筑後)。

又ちやばねごきぶり〔モリチャバネを指すか?〕に就いては:

あぶらむし (土佐), いご (豊前, 筑前, 或いは普通種の小型の幼虫も含む)。

更に本草綱目啓蒙にある“一種形小サク四分許ノ長サニシテ云云”とあるものを矢野氏はチャバネゴキブリ〔恐らく正しくはモリチャバネ〕と考えた。

矢野氏はこの類の総称として、夥しい種類より成る半翅目の蜚虫との混合をさけるために、“アブラムシ”を排し、ゴキカブリより転じた“ゴキブリ”を以てすべきことを提唱した。更に上記本草綱目啓蒙に於ける記述を見ても、この名は Blattidae に所属する黒色の *Periplaneta* 属の種を総称していたと解釈すべく、“ゴキブリ”の名を〔松村氏等の如く〕特定の1種の和名とすることは不可であると論じた。

更に進んで、支那で“蜚蠊”と称するものは何を指すかについては、矢野氏も本草綱目の記述より見て、日本と共通の単一の種を指すものでなく、この漢字もゴキブリ類の総称であろうと考えた。

Bernard E. Read (1941): Chinese Materia Medica, Insect drugs, 134-138 を見ると:

“蠹蟲(Cockroach)”と“蜚蠊(Flying cockroach)”とがでているが、前者は *Cybister* 属のゲンゴロウ (上海産材料) とサツマゴキブリ (香港産材料), 及び Polyphagidae のゴキブリ (北京産材料) を含んでいて、又後者は Blattidae のゴキブリ3種と、チャバネゴキブリ及びオオゴキブリを含むものとなつている。いずれにしろ、このような特別な「漢字の研究」は別として、今日ゴキブリ類を指すのにこんな複雑な漢字を用いる必要は全くないであろうと思う。

本稿を整えるに当つては昭和39年度厚生科学研究費の一部を使用した。